

我が家の酪農経営

英田郡美作町巨勢酪農組合
杉山 進

私は満州開拓義勇軍農事幹部として渡満しましたが、途中で応召し、敗戦になって帰郷しました。当時は御承知のとおり世相は悪く、混乱状態の中になりましたので、いかにして祖国の再建をすればよいかとよく同志と語りあい、その結果先ず青年団結成を行い、青年活動を盛んにすると共に、経済面では、食糧の不足と肥料の不足を解消し、農家経済の安定を計るには、畜産を取り入れた農業経営を行うことが第一と考え酪農を選びました。それはかねて三徳塾、内原訓練所等で乳牛飼養の知識が少しばかりありましたし、農家も牛乳を飲み、卵を食べ、肉も食べられる農家になりたいと日頃願っていたことであります。そして、当時の農業会の技術員や組合長に相談いたしました。飼料不足の時であるから時期早々といつて相談にならず残念に思っていました。

たまたま湯郷の西本さん達が乳牛を導入せられた話を聞き、早速お世話になって、昭和22年11月に北海道から2才のホルスタインを4万2,000円で購入しました。これが私の酪農のはじまりであります。当時乳牛を飼った人達は誰もが経験していることと思えますが、現在のように指導機関や工場施設等なく失敗のうえに失敗を重ね、なみ大抵の苦労ではありませんでした。その間、今投げ出そう今投げだそうかと幾度か思いました。

しかし、今は酪農に踏みきって10年目に漸く光明を是正し、毎日明るく楽しく酪農に精出していきます。

経営規模及び経過

さて私が帰郷した当時、父が経営していた経営規模と現在私が経営している規模を比較すると、かなりの差がでてきました。父の時代に耕地は、田畑あわせて7反少々の小農で、遊んでいる山地の利用もせず、畑作としては蔬菜、甘藷、雑穀を栽培していました。私が経営するようになってから畜産を主体とした経営としました。耕地の増反をはじめ、山林の利用と年々反別をふやし、現在は耕地1町歩、開墾畑1.5反、牧

野改良地5反、採草地5反となり、乳牛4頭とそれに飼育鶏70羽を私達夫婦2人（父は68才で自分の気俵な仕事）でやっております。農繁期とか事業を拡張する時以外は人を雇わないで行けるようになりました。

終戦当時、多角的立体的農業が叫ばれ、私もその線でこの地方の特産物を栽培しました。薄荷、茶、煙草、乳牛、鶏そのうえ蔬菜と種々のものを取り入れ、多角的経営をやりました。そのため非常に忙しい毎日でしたがどれもかなりの成績をあげましたが、特に良質で安価で多量に生産し、その地帯の特産物として商品価値を高めることが条件となってきた今日では、農業経営もある程度専門的に企業化することが必要だと2～3年前からいわれ、私もその方向へと切り換え32年には、煙草耕作、1反7畝を中止し、蔬菜も自家用程度とし、養鶏と乳牛で粗収入の約6割を、乳牛のみで約5割をしめるまでに本格的に酪農を中心とした経営を行うことができるようになりました。

これまで私達が酪農を本当に自信をもって経営を行い、他の人達に確信をもって奨めることのできなかつた原因は、第4表のように、乳価の高低の差が激しく、殊に昭和30年は1升当り、30円となり、数ヶ月も乳代の支払いがなく、やっと清算ができた金は出資金にするというまことに酪農が不安定で、乳牛を手離す落伍者が多く出たことであります。しかし、近年乳価の高低の差も余りなく、各方面の努力によって、何とか安定に向っていますことは喜ばしく思っています。

私は学校時代「マラソン」が得意でしたが、酪農は「マラソン」と同じで、出発から力一ぱい走らず余裕を持って走ることが大切であると考えています。5年、10年先までの計画をたて、目標を持って、一步一步堅実に自分の能力にあわせ実行することが大切であろうと思います。殊に経営を拡大する際もできるだけ借金をせぬことで、農業は利潤が少なく、資金の廻転が遅いので、余程低利の外は借金せぬことです。

仮りに多額の利息で借金していると返済が大変で、

岡山畜産便り1959.08

中途何かの事故があった時行きづまるみじめさを考え、私は昭和23年より事業資金として毎月収入の約2割程度の月掛定期貯金を必要経費と同様に考えて積立てました。仔牛を育成し、大売却することも一つの積立と考えて事業資金を借金もせが、曲りなりにも現在のように乳牛や農機具を購入し、牛舎を改造し、牧野改良を実行してきました。これはちょうどマラソンのように非常な忍耐力と研究、努力を必要とすることでありましたがまたそれだけにまた楽しいことでもありました。私はいつも「乳牛や鶏は自分達が飼っているのではなく、家畜に家族の者が養ってもらっているんだ」という気持で、毎日家畜を管理しなければ総べて立派な成績を収めることができないと家内にいっています。

自給飼料計画及び栽培法

先ず年間の乳の生産量百石目標と、4頭飼育の維持に必要な蛋白質と総養分量を計算し、この7割を自給飼料で賄うように表の通り飼料作物の作付計画を立ててこれに基づいて自給飼料を栽培しています。表にあります通り、牧野改良5反、写真のようにこれが4頭の乳牛が飼育できる基礎であって、これは昭和31年12月から32年3月までの4ヵ月に2人雇い私と3人で荒起しを行い、部落の婦人会へ整理と播種を願い達成したものであります。

30度以上の粘土質の傾斜地に松や篠、つつじの雑木

林でしたが、開墾のとき基肥として反当炭カル4貫、溶燐16貫、石灰窒素6貫、堆肥200貫、(これは500貫はほしいのですがやむを得ず200貫となりましたが、後鶏糞堆肥を反当50貫補充)を施しイタリヤンライグラス・ペネニアルライグラス・オーチャードライグラス・ラヂノクローバ・レッドクローバーの5種を、2尺間隔に条播しました。それが発芽も良く順調に成育して以来、毎年春秋の2回に反当硅カル5貫、溶燐4貫、塩化加里2貫、鶏糞堆肥20貫を追肥としてやっています。

牧草地の出来、不出来はこの追肥の励行にあると思います。この牧草地により運動が充分できて健康で、乳量の多いしかも生産費が安く、優良牛の生産ができてきました。今後酪農の発展は、牧野改良にあるといっても言い過ぎでないと思います。また冬季飼料として甘藷が非常に好適です。牛の嗜好にも適し、栄養もあり、乳量も多くだすので出来得るかぎり作付面積を多くしています。またイタリヤンは冬季12月から5月末までの青刈としても良く、乾草にもよく、水田裏作にも適していますので青刈として給与し、産前産後1ヵ月、夏季でも乾草として給与しています。そのうえ、雨天以外は放牧場へ出すので運動も充分にでき、近年乳牛は病気もしなくなり種付けも1回で授精しています。このようにして本年は3頭牛乳(飼育頭数4頭)し、しかも乳量100石以上搾り、自給飼料7割として実現できる確信がついています。

第1表 自給飼料作付計画表

種 類	反 別	収 量	可 消 蛋 白	養 分 総 量	備 考		
	アール	kg	%	%			
紫 雲 英	13	4,875	1.0	48.750	7.0	341.25	サイロ埋草
エ ン バ ク	20	7,500	1.0	75.000	13.0	975.00	1/2サイロ
イタリヤンライグラス	15	4,490	1.5	67.350	11.0	493.90	3回刈1/2乾燥
甘 藷	15	芋4,490	0.5	22.450	26.0	1,167.40	1/2サイロ
		蔓4,490	0.7	31.430	7.5	281.25	
青刈トウモロコシ	20	9,375	0.7	65.625	9.5	890.63	
青 刈 大 豆	5	1,500	2.5	37.500	14.5	217.50	
テ オ シ ン ト	5	2,812	0.8	22.500	8.1	227.78	
下 総 カ ブ	20	7,500	0.5	37.500	6.0	450.00	
牧 野 改 良	50	15,000	2.0	30.000	10.0	1,500.00	
乾 草	-	3,000	2.5	75.000	40.0	1,200.00	
薄 荷 粕	-	5,625	2.5	140.620	40.0	2,250.00	2番 1,875 3番 3,750
				947.170		10,356.20	

岡山畜産便り1959.08

今後の方針

今この作北地帯には、ホルスタイン種、ジャージー種あわせて4,000頭の数となり、年とともに驚異的增加を見えています。しかし、現在総ての農業生産物は価格が低く、いわゆる「儲け」にならない状況ですが、牛乳も価格の不安定性はぬぐい去ることはできないのではないかと、それには国や県の安定対策だけにたよることなく、私達は私達にでき得ることをやらなければならない。それには乳質改善、運営改善を行い、搾乳頭数の増加と系統牛の導入、牧野造成、改良など勿論行わなければならないが、より大切なことは、個々の多少の利害関係にこだわらず、種々困難なことに耐え忍び、ともに助け合い協力してやろうという気持が酪農家の人々に盛り上がることが、酪農発展の第一の要件だと考えています。

そこで私達の一部落の農家16戸のうち、酪農家7戸で飼育頭数17頭、小さいなりに部落の酪農家の者が畜舎改善に、サイロの新設に、集乳所の建設にお互に助

け合い実行しています。

今後協同牧野改良3町歩もいたす計画をしています。私はできることなら5年後には協同経営管理の線へ持って行きたいと研究し、一層張り切って酪農へ努力しています。

この酪農が発展し、生活の基盤となり、次代の青年達が進んで農村にとどまり、娘達は喜んで農家に嫁ぐ豊かな平和農村の築かれことをこいねがい、ますますお互に酪農に励みたいと思います。

(筆者 篤農家)